

アコーディオンが他の楽器と変わる時代の到来か

川口裕志



わずかばかりの花壇や屋上の鉢植えに、ようやく菜の花や水仙が黄色い花を咲かせ、早春の賑わいを見せている。春を待つ気分は誰しも同じ。だが、ことさら開花の時は心が洗われる。水仙は、土の中で固まった球根として冬の寒さをじっと耐えながら、大気のぬくもりを感じた一瞬に芽を吹き出し、瞬間に茎を伸ばして花を咲かせる。その新鮮な肌合いと鮮やかな黄色は目を見張るばかりだ。かなりの日陰でもきちんと花を咲かせる—そんな水仙の慎ましい振る舞いと可憐な姿、そして強さが、僕は好きだ。

我が家の春。

花といえば「府中郷土の森博物館」から梅祭りへの要請を受けて SAC (三多摩アコーディオンクラブ) と羽根木アコーディオンクラス のメンバーが参加した。花見客を集め、旧府中尋常高等小学校校舎 (記念館) の教室で 2 ステージ—100 数十名の参加で会場が沸いたという。その前座が「ルミエール府中」の主催事業として開



催された「ちょっとひといきコンサート in 府中」(アコーディオン・アンサンブル Air 出演/財団法人府中文化振興財団主催)。一般市民に無料開放され 30 年の歴史を持つ月一のコンサートに推薦された。毎回演奏希望者がプロ、アマを問わず殺到の中、栄冠を得た。初めてアコーディオンを聴く 250 名の市民が 2 拍子でカー

テンコールの拍手を贈った。

氷の花といえば札幌の雪祭りもその一つだが (小出さん (読売) がボランティアで制作に参加)、その氷の祭りが東京都檜原村で開催 (3/14)。アコーディオンがオカリナ (村長さん) とキーボードとのセッション及び単独演奏で参加した。村おこしの熱意がピンピンと伝わるコンサートで



あった。ちなみに氷彫刻の制作者はその道の世界コンテスト1位入賞者の平田兄弟（今年は白鳥とバレンタインがテーマ）。余談ながらその道行きで、雪道を登る愛車に軽自動車と正面衝突、我が車はオシャカとなった。

3年目を迎える「春風ライブ-守山テラス」に羽根木クラスが今年も出演。地域の小学校のPTAのOBらが「あったらいいな、こんな学校」を合い言葉に、行政と交渉して小学校の校庭に円形テラスを作り一般公開。地域と学校を結ぶ活動をしていこうとがんばっているイベントだ。今回は、アコーディオンにクラリネットとバイオリンのセッションとなった。クラリネットは近所に住む19歳の音大生。アコーディオンの音色が好きだという彼女は、将来の進



路に悩んでいる。今回の参加でちょっと活路を見出したようだ。地域の女声コーラスにもアコーディオンとクラリネットのアンサンブルで伴奏。聴いていたアコースティックなバンドグループのメンバーから「アコーディオンと組んでみたい」の声も上がった。

今年の2月～3月はいつになく演奏の機会に恵まれ、他のイベントも含め毎週のようにアコーディオンで繰り出していた。多摩市のゆう桜ヶ丘歌の集いにも出演（稲城AC）したが、その会館から秋の20周年記念イベントに出演を要請された。いま、その演奏をプラスとのコラボでとのアイデアが出されている。最近の特徴は、他の楽器とのコラボレーションが一段と進んでいるということだ。そのことは昨年、関東アコーディオン演奏交流会20周年記念文集に書いたので一部抜粋する。

「関東アコーディオン演奏交流会20周年記念文集」寄稿からの抜粋

昨今、ピアソラブームあたりからか、プロ、アマを問わず、アコーディオンと一緒に演奏したいという要求が一般の音楽家や音楽愛好層のなかに増えてきた。この秋、私の関わる稲城アコーディオンサークルで、ある大病院の職員で結成されたプラスアンサンブルとコラボレーションする機会があった。稲城サークルの新人メンバーが同じ職場の楽器経験者を集めて、患者の慰問演奏活動をはじめた。一方、そのグループとコラボレーションしたいとの稲城サークルの申し入れが喜んで受け止められ、ある文化センターの祭りに出演となった。普段10人弱で活動するというサークルが、一挙に15人編成のアコーディオン&プラスアンサンブルとなり、演奏も上々、客足も増えた。互いの音楽的感性が相互に刺激し合い、それぞれの意欲を向上させる。こうしたコラボ（共同制作）が新しい音楽的価値を生み出していき、一つの典型ともなった。また、よく見渡せば、職場、地域には音楽的技量を備えた、とくに若者達がかなり埋もれているという事実の発見でもあった。



「ちょっとひといきコンサート in 府中」でもチェロの参加があったが、昨今、前述の音大生のように音楽を専攻してもその道で生きていくことの難しさを感じている多くの学生がいて、音楽の専門的な力をもちながら他の職業に就く例が圧倒的となっている。一方、中学、高校ではとくにプラスが盛んで、コンクール出場のために腕を磨き、高いテクニックを身につけた学生が毎年大量に世に排出されている。しかし、いったん社会に出ると楽器を続ける道は閉ざされている。

そんな中、改めてアコーディオンの果たす役割が見直されているのではないだろうか。アコーディオンはリズムもコードも出せてメロディーもひける。他の楽器と組んでも様々な役割を担えるということだ。弦楽器や管楽器など単旋律の楽器にはそのバックで参加できる、というように。一昔前は弦楽四重奏とか、弦楽トリオとか、特にクラシックの世界では楽器が固定され、アコーディオンが入り込む余地はなかったが、最近は何でもありだ。様々な楽器と組み合わせることで新たな魅力が広がっている。アコーディオンの世界でもシュテファン・フッソングさんをはじめ、トロンボーンと組んだり、簫と組んだり、様々な試みがされている。「アコーディオンが群れている」と批判した若者がいたが、アコーディオンだけで固まらないで他楽器と積極的に競演していくことは今後アコーディオンの大きな課題だ。

さて、わが三多摩教室、10代、20代の若者を迎えてちょっと活気づいている。とはいえ60代をこすメンバーが圧倒するのだが、その分、個々の人生の中でアコーディオンがしっかりと定着している姿がうかがえる。最近「幻の楽器：GOLA」をてい入れたメンバーもいるがこれもそんな現れかもしれない。絵画にも情熱を傾け個展を準備している菊地さんは、そこでアコーディオンを弾くという。絵と音楽の融合、これは音楽の発展形だ。伊藤さんはブルガリアンダンスを習い、そこにアコーディオンを取り入れたいとクロマチックアコーディオンをがんばっている。目を見張る前進ぶりの宮久保さんは「エデンの東」の跳躍コードをみごとにつかめるようになったし、直ちゃんは十数年間、皆勤で通している。80歳を超えた松原さんをはじめゼンザーズのメンバーもがんばっているという。老人いじめの医療制度が進行する中、負けないで元気に生きていってほしいと思う。アコーディオンがその支えになれば本望である。